

「読売新聞オンライン」(令和4年8月3日)より

ボランティアを身近に体験...高2女子生徒「してあげたいこと発見できた」

「第46回全国高等学校総合文化祭東京大会 とうきょう総文2022」(読売新聞社特別後援)のボランティア部門のフィールドワークが3日、東京都小金井市の会場などで行われた。普段からボランティア活動に取り組んでいる全国の高校生が、外国人留学生や市民らと交流した。



「とうきょう総文2022」ボランティア部門で、SNSの使い方を来場者に教える高校生ら(3日、東京都小金井市で)



ボランティア部門で発表する高校生ら(3日、東京都小金井市で)



「とうきょう総文2022」ボランティア部門で、回廊作りに参加する中国の留学生(右)(3日、東京都小金井市で)

ボランティア部門は、演劇、日本音楽などの規定部門とは別に、開催地が独自に設ける協賛部門の一つ。ボランティア活動の盛んな東京で、「ハードルが高いと思われがちなのボランティアが身近なものであると感じとってもらう」(同文化祭東京都実行委員会)のがねらいた。

この日のフィールドワークでは、高校生たちは障害者との交流、デジタル活用支援など四つのコースに分かれて活動を体験した。小金井市のホールで行われた「留学生への理解を深める」には、32人が参加。同市内の東京学芸大の留学生に行ったアンケート結果を基に、どうすれば相互理解を深められるか、困っていることにどんな対応が可能かなどを、留学生とともに話し合った。島根県立 ^{みとや}三刀屋 高校2年の長谷川智香さんは「住んでいる地域では、留学生と交流する機会があまりないだけに、貴重な時間だった。してあげたいことを発見することができた」と話した。